2011年　5月8日・東京新聞（特報欄）では

17年前に事故〝予言〟の詩

南相馬の詩人原発の危険訴え続け

神隠しされた街

若松丈太郎

四万五千の人びとが二時間のあいだに消えた
サッカーゲームが終わって競技場から立ち去った
のではない
人びとの暮らしがひとつの都市からそっくり消えたのだ
（中略）
半径三〇 km ゾーンといえば
東京電力福島原子力発電所を中心に据えると
双葉町　大熊町　富岡町
（中略）
そして私の住む原町市がふくまれる
こちらもあわせて約十五万人
私たちが消えるべき先はどこか
私たちはどこに姿を消せばいいのか
（中略）
街路樹の葉が風に身をゆだねている
それなのに人声のしない都市
人の歩いていない都市
（中略）
私たちの神隠しはきょうかもしれない
うしろで子どもの声がした気がする
ふりむいてもだれもいない
なにかが背筋をぞくっと襲う
広場にひとり立ちつくす

東京電力福島第一原発から二十五㌔の距離にある福島県南相馬市の「緊急時避難準備区域」に、四十年前から原発の危険性を訴え続けてきた詩人がいる。高校の国語教師だった若松丈太郎さん（七五）。十七年前に発表した「神隠しされた街」は、今日の事態をそのまま描き出したような作品だ。（文化部・石井敬）

街が…東電・国に怒り

原発事故で屋内退避指示が出され、一時はゴーストタウンと化した南相馬市。指示の解除で半数以上の市民が戻ってきたが、海岸近くの田んぼにはいまも漁船とがれきが散乱したままだ。
五十年前からこの地に住む若松さんの自宅（旧原町市）は被害が少なかったが、原発事故で先月下旬まで一カ月以上、福島市に避難した。
「若い人は街に戻ってきません。一番強いのは東京電力と国がしてきたことへの怒りです。自分が言ってきた通りになったといって、得意な気持ちにはなれません」
一九七一年の福島第一原発の完成前から、若松さんは地元紙や詩人会の会報などに、原発の問題点を指摘する

文章を発表してきた。

「原爆のことが頭にあるから、これは怪しいものではないか、事故が起きたら大きな被害をもたらすものを人間がコントロールできるだろうか、という思いがあった」

九四年には「チェルノブイリ福島県民調査団」に参加。住民が避難した半径三十㌔地帯を訪ねた。事故を起こした原子炉をコンクリートで覆った「石棺」そばの展望台では、放射線量計の針が振り切れた。

「自分の住む場所の状況と重ね合わせ、大きなショックを受けた」

若松さんの作品「神隠しされた街」（九四年）は、帰国後に発表した連詩の一つだ。

昨年刊行した詩集には、東京電力の柏崎刈羽原発事故を題材にした作品を収め、こう結んだ。

〈肌に快い海風が陸地に向かう／肌は風を感ずることができるものの／肌は風にふくまれるものを感ずることはできない〉

若松さんは「原発のことを書くたびに、もうこれで終わりにしたいと思ってきた。でもこうなったら、とことん付き合わなきゃいけないかなと思っています」と語る。

原発に関する詩や評論を集めた『福島原発難民　南相馬市・一詩人の警告』（コールサック社）が今月、刊行された。

作品「神隠しされた街」は、予言的な内容に驚いた中原中也賞詩人アーサー・ビナードさんが英語訳をしており、出版の計画が進んでいる。

と紹介されています。